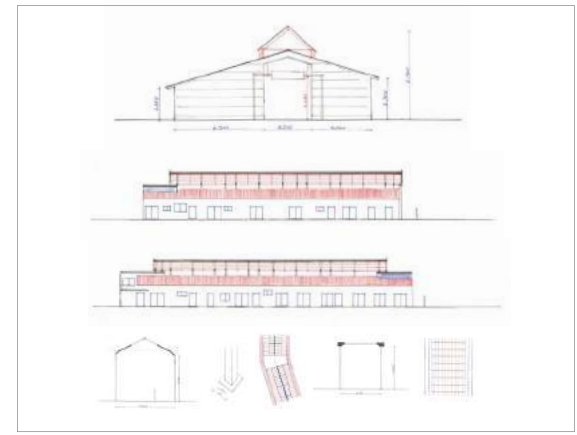




Photo collage for the Nakabenten street project.



Memory survey for the Sequential memory.



Measurement survey for the Nakabenten street project.



Modeling survey for the Nakabenten street project.

Modeling study for the Nakabenten street project.



bird's-eye view of the nakabenten street



Nakabenten street project, 2016



Benten street, 1968



## 連続する記憶

- 共有記憶を再構成する建築の設計 -

建築には記憶を蓄えておく機能がある。

本研究は、記憶を建築のひとつの機能として認識することで、記憶に関わる建築の価値を再考するものである。

「記憶」というキーワードから建築や都市を構想するにあたって、建築における最も根源的な事象として「住まうこと」に焦点をあて、

本研究をより普遍的な都市問題と関連づけて考察を行なうために、仮定した地方都市中心市街地における地域居住をテーマとし、ケーススタディとして前橋市中心市街地を選定した。

前橋市中心市街地で、記憶を顕在化する調査を行ない、顕在化した記憶を設計提案に展開することで、記憶に関わる建築の価値を思考し、地方都市中心市街地における現代的な都市更新手法を提示する。

最後に、私の個人的な切り口から生まれた確信犯的なプロジェクトに対して、建築の文脈において「記憶」を扱った建築家アルド・ロッシの思想を現在にまで引き延ばし、より深く思考するための手立てとする。



Aldo Rossi (1931-1997)



Palazzo della Ragione (1218)



0. 「住まい方」と「記憶」の関係性

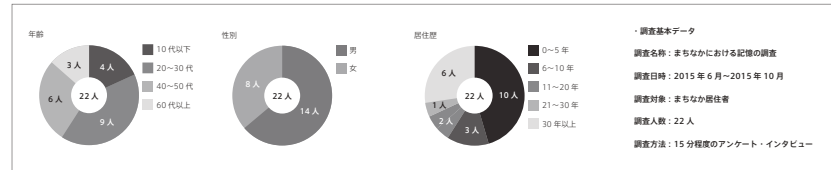
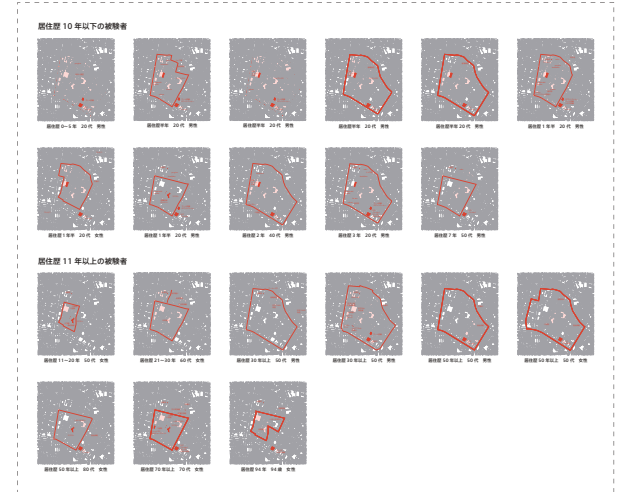
	住まい方 life	記憶のあり方 memory
かつて past	土着的に住まう	地域住民による 原風景・記憶の共有
↓	↓	↓
いま present	選択的に住まう	原風景・記憶の多様化
これから future	選択的に土着的に 住まう	背景の異なる住民による 原風景・記憶の共有

1. 記憶の調査

前橋市中心市街地における旧居住重点地区の居住者（まちなか居住者）を対象に、アンケートとインタビューを用いて記憶の調査を実施した。

<質問項目>

- ・年齢・性別・居住歴・居住エリア
- ・まちなかの範囲と形成要因
- ・生活領域と形成要因
- ・よく行く場所について
- ・よく参加するイベント、集まり、地域集會、お祭りについて
- ・好きな場所について
- ・人とよくコミュニケーションをとる場所について
- ・facebookを利用しているか
- ・コミュニティにおけるストレスを感じるか
- ・開わりにくいと感じているコミュニティはあるか



かつては住まうことが土着的であり、家族・近隣住民・町内といった土着的な枠組みの中で、地域で共有している原風景や記憶が存在していた。しかし、住まうことが選択的になった現代では、それぞれが異なる原風景や記憶を持つようになり、非常に多様化している。そこで、ひとつの可能性として、居住歴の新旧、世代やライフスタイルの違いに関わらず、地域で記憶を共有可能な状態をつくることで、これからの地域居住の新しい前線を提示することを考えている。例えばそれは、まちの記憶を介した人と人とのつながりや、多世代で構成された持続可能な地域自治組織の形成など、まちの記憶が人と人との間にすることで、孤立を生まない関係性が構築できるのではないだろうか。また、地域の固有性や地域文化の継承や創出といった、失われつつある場所の求心性をとりもどすことにもなる。

2. 被験者が記憶の対象とした主要要素

居住歴 10年以下の被験者	居住歴 11年以上の被験者
<p>よくいく場所</p> <p>元気プラザ 21 valo kioski</p> <p>よくいくイベント、集まり、地域集會、お祭り</p> <p>アーツ前橋 maebashi works yaginis frasco bushitsu mbox</p> <p>好きな場所</p> <p>広瀬川 弁天通り</p> <p>よくコミュニケーションをとる場所</p> <p>シェアフラット馬場川 シェアハウス</p>	<p>よくいく場所</p> <p>元気プラザ 21 スズラン百貨店 八百物 大蓮寺</p> <p>よくいくイベント、集まり、地域集會、お祭り</p> <p>元気 21 大蓮寺 聖野出世僧神社 千代田町五丁目自治会館 いきいきサロン</p> <p>好きな場所</p> <p>弁天通り 中央通り 広瀬川</p> <p>よくコミュニケーションをとる場所</p> <p>弁天通り いきいきサロン 千代田町五丁目自治会館 立川町会館</p>

3. 記憶の分析

居住歴 10年以下の被験者

居住歴 11年以上の被験者

選択的な暮らし方

土着的な暮らし方

居住歴10年以下の被験者は、比較的新しい多く小さな「場」を選択しながら生活し、「選択的なつながり」を形成して生活している。→「選択的な暮らし方」

居住歴11年以上の被験者は、伝統的な空間や、地域の拠点をベースに「土着的なつながり」を形成して生活している。→「土着的な暮らし方」

4. 「選択的な暮らし方」と「土着的な暮らし方」

記憶の分析をした結果、異なる集団間の異なる人の結びつきを「選択的な暮らし方」と、集団の内部における同質的な結びつきを「土着的な暮らし方」が顕在化した。



居住歴10年以下の被験者は、比較的新しい多く小さな「場」を選択しながら生活し、「選択的なつながり」を形成して生活している。→「選択的な暮らし方」

居住歴11年以上の被験者は、伝統的な空間や、地域の拠点をベースに「土着的なつながり」を形成して生活している。→「土着的な暮らし方」

6. 設計提案の方向性 「共有記憶の再構成」

記憶の調査によって顕在化した共有記憶を地域固有の資産として捉え、新旧に関わらず、あらゆる地域住民がまちの記憶を共有可能な地域居住モデルを考える。そこで、3つの基本的な考え方を軸に設計を進める。

- 「記憶の核」と連続する構成要素をもつこと。
- 社会に帰属する空間と機能をもつこと。
- 計画プロセスに地域住民が参加すること。

「記憶の核」が個性を表現し、より共有しやすい状況を計画するにあたって、意図的な連続性、空間的連続性が重要なデザインコードになる。

計画を行なうにあたって、計画範囲だけでなく、より広範囲の住民の関わりを促すために、社会に帰属する空間と機能をもつ。

資金運用や施設管理のために、地域住民による「マネジメント組織」を設立し、地域住民と新規居住者の拠点をつくる。

5. 「記憶の核」の顕在化

長い間この場所に存在し、共有記憶を形成している歴史的な「記憶の核」が顕在化した。地域社会に根ざしつつも、他者に対して開かれたこれらの構成要素は、過去・現在・未来に属する都市の住民たちにとっての共通財産である。




7. 計画エリアの選定

前橋市の整備方針では、広瀬川河野橋エリアを「旧市を中心とした複合ゾーン」として位置づけられており、居住機能の集積、商業・業務・交通機能を誘導するエリアとしており、生活文化の拠点として整備する必要がある。そこで、弁天通り河野橋エリアと旧市河野橋エリアを計画地として選定する。



# 中弁天通りプロジェクト

nakabenten street project



before → after

**まちの共有記憶を拡張し、居住促進の拠点をつくる**

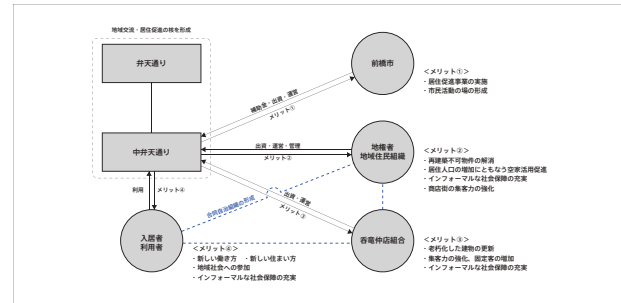
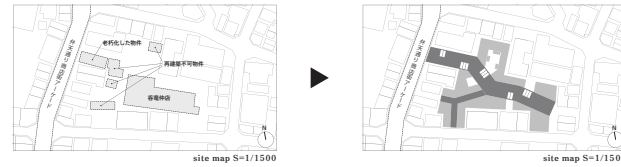
弁天通り周辺エリアでは、歴史的に暮らす人々のいくつかの拠点や、土着的に暮らす人々の拠点になっている大進寺が弁天通り商店街アーケードに面しており、記憶の核である弁天通り商店街アーケードを共有することで、両者の拠点が生み出される。

本プロジェクトでは、弁天通りが2つのコミュニティの接点となっていることに着目し、新しい働き方や住まい方を移住促進の軸とした地域居住モデルを隣接する街区に設計する。

商業の論理で構築された商店街のアーケードを再設計し、生活の量があふれだすアーケードへと転換する。

## 計画地と事業スキーム

弁天通り商店街アーケードの東に隣する街区を対象地とする。地域住民によるマネジメント組織を設立し、各関係者にメリットを生むような事業計画としていく。既存する駐車場・空き地・再建築不可物件の土地を活用しながら弁天通り商店街アーケードを拡張するように計画を行なう。



## 記憶の核の建築的分析からアーケードを居場所化する6つのデザイン手法へ

共有記憶のつなぎ方を考えるにあたって、記憶の核を客観的な視点から観察するために、現地での実測調査と写真を基に視覚化を行なった。調査結果をもとに得られた5つのデザインコードを基本的な考え方として、モデルによるスタディを行い、アーケードを居場所化する6つのデザイン手法を導き出した。

survey	
design code	
study model	
design method	

### 屋根裏テラス

学生用シェアハウスの最上階から階段を下って辿りつく屋根裏テラスには周囲に机が配置され、勉強室をしながらアーケード下の活動に臨むことができる。



### 千代田町三丁目リビング

シェアハウスの男子棟・女子棟それぞれのコモンキッチンに面した千代田町三丁目リビングは、アーケード下の空間から直接アクセス可能であり、日常生活の延長だけでなく地域の行事にも活用される。



### 打合せ室

2つのSOHO棟の2階はそれぞれオフィスフロアになっており、2つの棟をつなぐように打合せ室を設けることでアーケードというスケールの大きな空間にゆるやかに接続され、気持ち切り替える場所として機能する。



Attic terrace for share house area



Living for Chiyodamachi 3 chome area

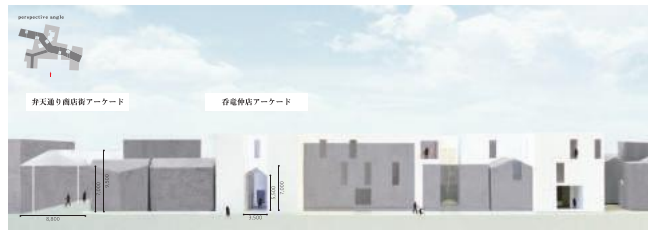


Meeting space for office area





cross section perspective S=1/100



south elevation S=1/400



west elevation S=1/400



Image of the Nakabenten street arcade.



1st floor plan S=1/300



2nd floor plan S=1/500



3rd floor plan S=1/500

#### 住空間としてのアーケード

商業の論理で構築された商店街のアーケードを住空間としてのアーケードに転換する。  
地上階は管理事務所と呑電商店（建替大）のほか、千代田町三丁目の集会所やキッチンといった地域交流を促進する機能や、託児所、診療室、薬局、シアター、カフェ、ライブラリーといった生活支援機能、シェア工房、アクセスといった新しい働き方を支援する機能を配置している。  
また、上階階ではスタディから導かれた6つのデザイン手法を用いて居場所化されたアーケードに生活の景がふれやすように、リビング、キッチン、モンスペースといった人が多く集まるプログラムをアーケードに面して配置している。  
さらに、光や風を住空間にとり込むために、複数のヴォイドを設け、ヴォイドを介してアーケードとの多様な距離感を形成するために、居住ボリュームにも複数のヴォイドを挿入した。

#### スケールの転写

弁天通り商店街との連続性をつくりだすために、中弁天通りのアーケード空間は弁天通り商店街アーケードから得られた寸法を用いて計画されている。  
建物の老朽化が激しく建て替えた呑電商店も同様、建替以前のアーケードから得られた寸法を用いている。